

## 〔特別展 国宝寢覚物語絵巻によせて〕

## 寢覚物語絵巻 第1図について

「寢覚物語絵巻」は「寢覚物語」を絵画化した物語絵巻です。現状では絵4図と詞書4段分から成っていますが、錯簡や散逸部分が多く、詞書をそのまま読むと文意が通じません。そのため、各図がどのような場面を描き出しているのか理解し難くなっています。

ところで、東京国立博物館と国立国会図書館とには、天和2年(1682)に住吉具慶が模写した「寢覚物語絵巻」の模本を、更に転写した模本が収蔵されています。国立国会図書館蔵本の来歴は不詳ですが、東京国立博物館蔵本は狩野養信が天保2年(1831)に模写したものです。これらの模本と照合してみると、錯簡などのある現状は天和2年以後の状態をそのまま保っていることが知られます。

このような現状に加えて、絵画化された場面は末尾欠巻部と呼ばれる物語本文自体が散逸している部分にあたります。話の内容は、『無名草子』『物語二百番歌合』『風葉和歌集』など、評論や物語に取材した歌集に断片を伝えているに過ぎません。従って、遺された詞書だけでは把握しきれない絵の内容は、当初の姿を復元しつつ解釈を加えることが求められます。これまでの研究の蓄積によって、詞

書の錯簡はほぼ正され、また、場面の解釈も加えられてきました。しかしながら、第1図のみには対応する詞書が完全に欠如しています。そのため、場面の解釈は多分に検討の余地を残すものとなっています。

以下では、このように未だ詳らかにされていない第1図を採り上げて、解釈を試みようと思います。

先立って、末尾欠巻部で展開する事件について述べておきましょう。末尾欠巻部では、二つの大きな出来事が起きています。一つは女主人公寢覚の上が帝(冷泉院)の求愛に窮したため引き起こした擬死事件であり、もう一つは女主人公が辛い恋愛相手である男君との間にもうけた息男まさこが冷泉院から受けた勸当事件です。

これまで有力視されてきた解釈に拠ると、第1図は寢覚の上晩年ののどかな一情景で、実は生きていたことを男君に知られ、許可を得て出家生活を営んでいるところに、男君が訪ねてきた様子とされています。左下隅の正面向きの女性は、髪型が尼削ぎであることから、出家した寢覚の上、その傍らにいた背面向きの女性は恐らく亡夫(老閨白)の三人の娘のうち一人の君、烏帽子の男性は男君、と人

物の比定がなされています。

この解釈で問題があるのは、烏帽子の男性の姿態です。この姿態は、「扇面法華経冊子」無量義経(四天王寺)をはじめ類例が多く数えられ、垣間見する男性をあらわす〈型〉として典型化していたと考えられているものです。先の解釈では、男君が垣間見をする必要性があるとは考えられず、男性に適用された垣間見の〈型〉は意味をなさずに宙に浮いてしまいます。

もう一つ気に掛かることは、男性の眼前に描かれた几帳です。僅かに上部を覗かせるだけの描写となっていますが、この描写の在り方には注意されましょう。純粹に画面づくりにおける効果という点からすれば、別段なくても良く、むしろ不必要なものとも見えます。少なくとも、他の作品には見られないような描き込みのなされ方です。それを殊更に僅かでも描こうとするのは、この場面においては是非とも必要な道具であったためではないでしょうか。

以上の2点を押さえたところで、注目されるのが、近年出現した伝称筆者を慈円とする『寢覚物語』の古筆切(13世紀前半)です。3葉知られていますが、うち1葉が特に重要です。誤写があるようで文意が通じにくい箇所もありますが、できるだけ解釈し易いように表記を改めて次に記してみます。「気高く宿徳なる様したり。その傍らに添ひて、そば見たる人は、僅かに24.5に及ぶ程と見えて、いと若う美しげに額髪もゆくゆくとふ

さやかに剃ぎ懸けられたる顔つき、傍ら目、言ひ知らずいみじき人なりと目も驚かるるに、我が明け暮れ心に懸けて恋しく思いきこゆる昔の面影と、ふと思ひ出らるる心地して、きりふたかる涙を掻き払うほど、風の荒らかに吹きて、几帳

24.5歳に見えるのは、髪を尼削ぎにしているためであり、観察者はこの尼削ぎの女性こそが恋しく思っていた人物のようだと感慨を深めています。そして、最後の風に几帳が吹き上げられる部分は、確かに姿をとらえる展開へと続くことが予想されます。

女性二人を垣間見しているらしいこと、几帳が視界を遮っていること、二人の女性のうち尼削ぎの女性が重要人物となっていること、これらの諸点は第1図と正に合致していきましょう。

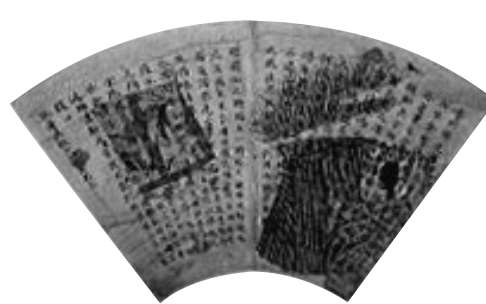
伝慈円筆切の研究では、尼削ぎの女性を寢覚の上、もう一人の女性を斎宮、女性たちを見ている人物をまさことし、まさこが擬死した寢覚の上を発見するくだりとされています。つまり、第1図は「まさこの寢覚の上発見」とでも名付けられる場面であり、失われた詞書はこの古筆切の内容を含む文章であったと推定されます。

未だ不詳の三人の童子があそぶ桜の咲く屋外の華やかな情景に眼を奪われがちですが、如上のように理解すると、屋内の描写になみならぬ緊張感が満ちていることに、新たに気付かされるのではないのでしょうか。(澤田和人)

寢覚物語絵巻 第1図・部分



扇面法華経冊子 無量義経・扇6 四天王寺蔵



寢覚物語切 伝慈円筆 個人蔵

